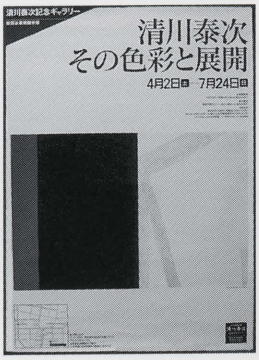
平成 17 年度　第 1 期展
清川泰次　その色彩と展開

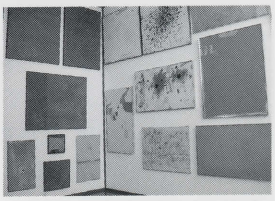
会期：4 月 2 日～ 7 月 24 日
入場者数：900 人
担当者：髙嶋雄一郎

具象から離れ抽象画へと向かった 1950 年代以降、清川泰次は画中の色彩とその質感にとりわけ細心の注意を払うようになった。そうした末に達した 1970 年代の「白の世界」のシリーズでも、そこでは色彩の欠如ではなく、あらゆる可能性そして豊かさを含んだ、最も普遍的な色彩としての“白”に辿り着いたと考えることが出来るだろう。そして 1980 年代、清川は再び豊かな色彩をその画中で展開し、純然たる色彩と形の最良の関係性を模索するのである。「…今後も私は私が一番美しいと思う色を使い作品を構成して行くだろう。」（清川泰次『画集「色」』1989 年）清川自身がこう述べている通り、「色」は清川が絵画を制作する上で、生涯一貫して最も重要な要素であったことがうかがえる。この第一期展では、こうした変遷が辿れるような作品を中心に展示し、その豊かな思索を辿った。



B2 ポスター

B3 ポスター


展示風景

出品目録

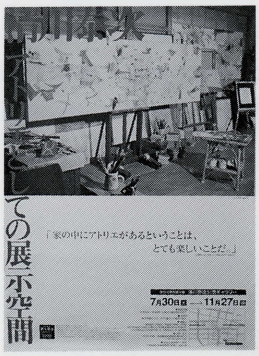
No.	作品名	制作年
1	ビリジャンでおおわれた作品	1955 頃
2	左にペールグリーン右にペールイエロー	1958～9
3	インディアンレッドの作品	1959
4	うすみどりの絵	1959
5	早い夏	1959
6	季節の外 -59	1959
7	Fall（秋）	1959
8	白の中の鉛筆の華	1960
9	ブルーの絵	1960
10	オキサイドグリーン	1961
11	ブルーと紫	1962
12	白の中の黒タテ線	1962
13	茶色と黄	1962
14	ピンクの虹 -62	1962
15	黄土色一色の絵・厚ぬり	1962
16	作品 100M-62 Red	1962
17	むらさきの絵 -63	1960～63
18	黄色の浮遊	1961～3
19	グレーの作品	1962～3
20	ザ・セルリアンブルー　100M-11-63	1962～3
21	Painting No. 262-3　紫とグレー	1963
22	Painting No. 5-62-3　赤とグレー	1963
23	群像表紙時代の四角作品	1963
24	インディアンレッドと黄土色	1965
25	白の中の黒一線	1965
26	Gray & Black & White	1967
27	黒と白の作品	1969
28	赤一色の絵	1960 代
29	紫のある風景	1970 頃
30	赤の中に一本の線	1972
31	白の中の一本の線	1972
32	黄四角　中に一本の線	1972
33	Painting No.3394	1994

平成 17 年度　第 2 期展
清川泰次　アトリエとしての展示空間

会期：7 月 30 日～ 11 月 27 日
入場者数：778 人
担当者：髙嶋雄一郎

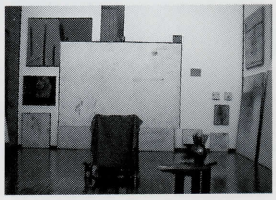
清川泰次記念ギャラリーは、清川泰次氏が生前に自宅兼アトリエとして 40 年もの長きにわたって愛用した空間をそのまま譲り受け、若干の改装を経て世田谷美術館の分館として開館したものである。その空間の床には油彩絵の具の跡がそこかしこに残っており、当時の真摯な制作活動が偲ばれる貴重な空間となっている。

この収蔵品展では、清川泰次が愛したアトリエでどのように制作を重ねてきたのか、またこの特異な空間がどのように活かされ今日への展示室へと繋がっているのかを、まさにその場所で制作された絵画作品と当時の記録写真（成城の街並みの変遷も含みながら）、そして資料などを交えて考察したものである。また、彼が二度にわたって渡米した際に撮影した、それらの地での制作の風景なども展示することにより、清川が“アトリエ”という空間にどのように思いを馳せていたのかを検証した。



B2 ポスター

B3 ポスター


展示風景

出品目録

No.	作品名	制作年
1	仮面のある	1953
2	点々々 -56	1956
3	20 号の白の風景	1956
4	題の無い絵 -59	1959
5	白の歴史	1959
6	紫と黒の作品	1960
7	Painting No. 100P-5-62 白	1962
8	グリーンの F10 号	1962
9	Painting No. 662-3　黒い雨	1963
10	Painting No. 762-3　点々太陽	1963
11	Painting No. SF5463	1963
12	Painting No. SF5563	1963
13	Painting No. SF364	1964
14	Painting No. SF3164	1964
15	Painting No.SF6264	1964
16	ペール白の（ニューヨーク作品）	1965
17	Painting No. NY1766	1966
18	Painting No. NY2166	1966
19	コーラルレッドの 3 号 -67	1960～67
20	白の中の何本かの線	1972
21	ブルー一色 サムホール	不明

平成 17 年度　第 3 期展
清川泰次　芸術とデザイン

会期：12 月 3 日～ 2006 年 3 月 26 日
入場者数：719 人
担当者：髙嶋雄一郎

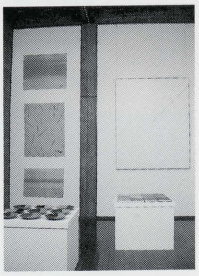
純然たる抽象画をその長き人生において探求した清川は、一方で商業美術やプロダクト・デザインに対する関心も同様に持続させていた。

1958 年には銀座松屋のウィンドウ・ディスプレイを担当し、「秋のアトリエ」と称して自身の作品を展示、公開制作を行った。翌年には三越本店で彼が意匠を考案した着物が制作され、1960 年代以降は書籍の装丁、雑誌の表紙などを積極的にこなす。1980 年代にはファブリックのデザインや有田焼、益子焼の絵付など、多岐にわたるこうした活動を美術同様に精力的に行ってきたのである。

こうした活動の背景には、清川自身が、自らの純然たる芸術もしくはその意匠が、形を変えながら人々の生活に溶け込んでいくことを心より喜んだことがあるだろう。純粋芸術、商業芸術を問わず、ここには彼の理念が通底しているのだ。この第 3 期展では、こうした清川の様々なデザインに関する仕事を回顧し、またそれらと同時代に制作された油彩画も併せて展示した。

B2 ポスター

B3 ポスター


展示風景

出品目録

No.	作品名	制作年
1	Painting No. 417980	1980
2	Painting No. 581–B	1981
3	Painting No. 182	1982
4	Painting No. 1182–7	1982
5	Painting No. 384	1984
6	Painting No. 484	1984
7	Painting No. 584	1984
8	Painting No. 6388	1988